

「環境落語」をご存じだろうか？ 落語家・三遊亭京楽さんは1995年から行っている「チャリティー寄席」の一環として、5年前から「環境落語」に取り組んでいる。未来を担う子ども達や若い世代にも分かりやすい歌や映像を駆使。環境だけでなく家族の大切さも伝える京楽さんの創作落語は「環境ミュージカル落語」「スーパー環境落語」とも呼ばれ、各地で好評を博している。

「水 墨画の勉強がしたくて京都の大学に進学したのですが、当時は関東から関西の大学に行く生徒は珍しく、独特の言葉使いやアクセントが分からないから友達もなかなかできず苦労しました。思案の末、「言葉」への関心から落語研究会に入ることにしたのです。水墨画の勉強をしに行くと、落語を覚えて帰ってくるとは想像もしていませんでした(笑)」

三遊亭円楽師匠に入門後、努力に努力を重ね、わずか4年で真打ちにスピード昇進。ところがその年、椎間板ヘルニアで車椅子の生活を余儀なくされる。

「腰が痛くて歩けない以外はいったって健康なんです。移動が難しいので仕事ができないのです。当時は今ほどバリアフリーが進んでいなかったものですから。「福祉落語」はこのときの経験から生まれました。「防災落語」は阪神大震災がきっかけ。友人の家が被災したというので様子を見に行こうとしたら、円楽師匠に「それなら落語をやってこい」と言われたのです。被災地で落語は不謹慎ではないかと思ったのですが、関東大震災のときなど、先人達は落語で被災者を勇気づけたのだそうです。実際に被災地で落語をやってみたところ、困っている人たちにこそ笑いを届けるべきだと痛感しました」

命の尊さ、家族の絆を描いた防災落語や人権落語とも言われる福祉をテーマにした創作落語のほか、聴覚障害者への日本語字幕落語や海外では英語字幕落語も開催。最近では特に「環境ミ

ュージカル落語」とも言われる創作落語が人気を博している。

「防災や福祉だけでなく、環境についても落語で呼びかけて欲しいという意見を多くいただきました。子どもを持つ一人の父親としても、何とか未来に自然を残したいとの思いから取り組むことにしたのです。ただ、環境は防災や福祉と違って身近な問題として捉えにくいところがあるので、どう表現すればいいのかずいぶん悩みました。難しい話ばかりでは聞いている方も疲れてしまいますからね。楽しみながら環境保護について考える内容にしたいと試行錯誤した結果、音楽や映像を取り入れたミュージカル落語ができました」

昨年発表した「大江戸区エコツアー2030」は映像を駆使しており、「スーパー環境落語」とも呼ばれている。京楽さんの環境落語は「カラスのグリーン」「シマミズ、ラッパーの恋」「ヒマラヤの北斗七星」の全4作だが、どの作品にも「家族の絆」が描かれている点も特徴だ。

「環境問題は文明の問題。つまり今問われているのは国のあり方、町のあり方、家族のあり方だと思うのです。元来、日本人は相手に不快感を与えない細かな気遣いや気配りを持っていました。古典落語の中にはそうした日々の生活を円満に送るための知恵がたくさん詰まっています。

ところが現在これら日本の美德は失われてしまい、コミュニケーションがうまくとれなくなってしまっている。一番身近な家族の間でさえもです。喜怒哀

今月の旬な人に直撃

第24回

落語家

三遊亭 京楽氏 Kyoraku Sanyutei



楽の表現がうまくできない子どもが増えているのもそのせいではないでしょうか。だから落語で笑いを届けながら、家族の大切さをもう一度考え直して欲しいとの思いを込めたのです」

昨年からは都立浅草高校で週2時間、落語の授業の講師を務めるなど、精力的に活動を続ける京楽さん。今後の目標は？

「世界のあらゆる地域の人々に落語の良さを伝えたい。特にアフリカや中東・南米の子ども達に、現地の言葉で落語を聞かせてあげたいと思っています。私が現地に行くのももちろんいいですが、現地の方に落語を覚えていただいて、そこから世界中の子ども達に落語で笑いと希望を与えられたらいいですね」▼

(取材日:2007年7月4日)

※「環境落語」の記事は47頁。

「百年かけて壊した地球を 百年かけて取り戻そう」

「環境落語」で笑いながら環境の大切さを伝えたい